



▲震災直後、避難所で鹿子躍を披露したのは、次代を担う若い世代だった。

1600年代に、行山流水戸辺鹿子躍は現在の南三陸町戸倉地区水戸辺で始まり、5代にわたり躍り継がれたが、水戸辺では鹿子躍は途絶え、躍りは現在の岩手県一関市舞川で継承されることとなった。1991（平成3）年に行山流水戸辺鹿子躍保存会の村岡賢一会長が中心となり、舞川の保存会の人々に教を請い、鹿子躍が南三陸町に復活した。その後、戸倉小学校の児童も練習に参加し、地域に定着してきた。

しかし、東日本大震災で再び危機が訪れる。水戸辺が津波に襲われたのだ。一軒の家もなくなってしまった水戸辺だったが、鹿子躍の太鼓や鹿子頭、装束が瓦礫の中からひとつ、またひとつと見つかった。奇跡だった。泥まみれの装束や道具をみんなで洗い、中学生たちが中心となり、2011（平成23）年5月の連休に避難所で鹿子躍が躍られた。見る者は涙し、勇気づけられた。

水戸辺には「奉一切有為法躍供養也」という言葉が刻まれた石碑が残っている。鹿子躍は「生きとし生けるものの供養のために躍られる」という意味だ。

行山流水戸辺鹿子躍を通して、水戸辺の人たちは、多くの失われた命を思い、大自然の中で生かされている命の尊さを改めて知ったのである。

「奉一切有為法躍供養也」と刻まれた、地域に残る石碑の拓本。▶

